

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	現代語「ばかり」の諸用法 —用法分化と用例分布の特徴—
氏 名	朱 琳

論 文 内 容 の 要 旨

現代日本語の助詞「ばかり」には多様な意味や用法がある。構文上では、名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞など多種類の成分と共起でき、その表す意味も、限定、比況、程度、直後など多岐に渡っている。「ばかり」は、伝統的な国語学の背景を持つ研究では、副助詞として扱われていたが、近年限定のとりたて助詞とする研究が盛んに進んでいる。先行研究をまとめてみると、「ばかり」には、とりたて用法（例：雨ばかり降る）、アスペクト的用法（例：引っ越してきたばかりだ）、程度用法（例：リンゴを三つばかり買う）の三つの用法がある。しかし、「ばかり」には大別された三つの用法以外に、「ばかりに」「ばかりか」など派生的な用法が多い。

また、現実には三つの用法の確な区分は困難であるが、とりたて以外の用法も広く用いられている。同形態である以上、日本語文法上の合理的な説明が必要である。学習者への説明においても、用法の分化のしくみを明らかにする統一的な枠組みが必要である。よって、本研究では「ばかり」のあらゆる用法をすべて見ることにする。「ばかり」のあらゆる用法を記述説明するため、一貫した研究方法を採る。

数多くの先行研究の中で、興味深いのは定延（2001）（2003）で用いられる探索という心身行動に着目する認知主義的アプローチである。定延（2001）では、「ばかり」のいわゆるとりたて用法についてこの説明を行っている。また、澤田（2007）では、定延（2001）の探索の定義と同じ立場をとりつつ、走査という概念を使用し、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法について分析を行った。筆者は、定延（2001）で「探索」、澤田（2007）で「走査」とされる認知的な観察行動が、「ばかり」のあらゆる用法で行われている、また、この発話者や聞き手による観察行動の違いによって、「ばかり」がなぜ異なる用法を表すかについて説明がつく、と考えている。したがって、本研究では、定延（2001）の探索と澤田（2007）の走査を基盤的な考え方として採用し、一用法だけで使われている探索や連続走査という名称を避け、「ばかり」全体に適用可

能な概念として区別するために、「スキヤニング考察」という新しい名称を設定し、一貫した記述説明する。「ばかり」のあらゆる用法を新しく分類し、どの場合にどの用法になるかを明らかにする。また、新しく分類した各用法の相違点や連続性を明らかにする。

また、定延（2001）（2003）や澤田（2007）では、探索／走査を行う時の客観的な課題の設定条件を明らかにしていない。双方とも、人間の心身行動の観点から、自然に導かれるものとして記述説明している。本研究では、「スキヤニング考察」によって、「ばかり」のあらゆる用法を研究し、分類することを目指すので、その前提となる課題の設定条件を明らかにする。

本論（第二、三、四章）では、名詞（句）、動詞（句）、形容詞／形容動詞／副詞などに「ばかり」が下接する場合における「ばかり」の諸用法について、『新潮文庫 100 冊』（CD-ROM 版）の昭和時代以降の用例から、「ばかり」の用例を採取し、分析する。スキヤニング考察という認知主義的アプローチを用い、「ばかり」の用法を再分類し、文中に分布する特徴を探し、各品詞に下接する「ばかり」の特徴を分析した。また、スキヤニング考察の課題の設定条件を提示し、すべての「ばかり」の用例に適用できるかどうかを検討した。

その結果、「ばかり」の用法を、スキヤニング考察の過程や帰結の違いによって、改めて、複数性明示用法、数量明示用法、高程度指示用法、時間関係明示用法の四つの用法に分類した。

- スキヤニング考察の帰結が「ばかり」の上接する語句の場合：
 - スキヤニング考察が複数回行われ、そこから得られた帰結が「ばかり」の上接する語句である。複数回のスキヤニング考察の結果の一致が強調される。この場合、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。
 - スキヤニング考察が複数回行われ、その過程で粗い計算、または総合的判断をし、そこから得られた帰結が「ばかり」の上接する語句である。この場合、「ばかり」の用法は数量指示用法である。
 - スキヤニング考察が複数回行われ、その過程で総合的判断をし、程度を表す語句の集合の中から「ばかり」の上接する語句を選択する。この場合、「ばかり」の用法は高程度指示用法である。
- スキヤニング考察をした結果、複数のデキゴトが互いに時間的前後関係にあり、「ばかり」の上接する語句は唯一、完了した、あるいは未完了のデキゴトだということにたどり着く。この場合、「ばかり」の用法は時間関係明示用法である。

四つに大別された「ばかり」のすべての用法に、スキヤニング考察が大きな役割を果たしている。このことは、「ばかり」のすべての用法の連続性を示している。また、複数性明示用法と数量指示用法、高程度指示用法の共通点は、スキヤニング考察の帰

結が「ばかり」の上接する語句にたどり着くことである。したがって、複数性明示用法、数量明示用法、高程度指示用法は、より近い用法で、時間関係明示用法は複数のスキヤニングを踏まえて唯一のデキゴトの完了／未完了に帰結する点で、ほかの三つの用法と特異であるといえる。さらに、一回一回のスキヤニングの結果と全体の帰結のいずれにおいても「ばかり」の上接語句にたどり着くのは複数性明示用法のみである。ほかの用法は一回一回のスキヤニング考察の結果を踏まえ、総合判断などで帰結として上接語句が得られる。以上のことから、複数性明示用法もほかの三つの用法と特異であるといえる。一方、文中に統語的な環境条件が提示されている時の用例、「んばかり」の用例、「動詞タ形＋と＋ばかり」の用例、また、「形容詞＋ばかり」の例文に見られる、「ばかり」の用法がどの用法であるかを判断に迷う用例なども、「ばかり」の各用法の連続性を示している。

「ばかり」の用例では、「名詞（句）＋ばかり」と「動詞（句）＋ばかり」の用例は圧倒的に多く、両方を合わせ、「ばかり」の全 6236 例の 91.7% を占めている。「ばかり」の四つの用法の用例数から見ると、一番多く使用される用法は「ばかり」の複数性明示用法である。また、「ばかり」に「で」「だ／である」が下接する場合、「ばかり」の表す用法は複数性明示用法に偏る。「ばかり」に「の」が下接する場合、「ばかり」の表す用法は、数量指示用法（「ばかり」が名詞句に下接する場合）と高程度指示用法（「ばかり」が動詞句／形容詞に下接する場合）に偏る。「動詞タ形＋ばかり」の場合、特殊な構文でない限り、「ばかり」の用法は時間関係明示用法である。「動詞テ形＋ばかり」の場合、「ばかり」の表す用法は複数性明示用法に偏る。「副詞＋ばかり」の場合、「ばかり」の表す用法は大きく数量指示用法に偏る。このような用法の偏りは、「ばかり」節の文中での位置と、「ばかり」の上接する語句の形態が大きく影響していると考えられる。

また、本研究では、「ばかり」によるスキヤニング考察の課題を明らかにした。課題の設定条件に、必須条件と追加条件、特殊条件がある。必須条件は、課題は「ばかり」の上接する語句についての質問であること、課題の述語は「ばかり」を含む節の述語部分を使用することである。また、課題の要点をなす疑問詞は「ばかり」の上接する語句の文中での意味によって、異なってくる。追加条件は、必須条件だけでは課題を設定できない場合、新たな条件が生まれる。つまり、課題の主語を、例文の「ばかり」を含む節の主語として設定することである。また、発話時以外の時点のスキヤニングを要し、必須条件だけでは課題が設定できない場合、例文中など文脈に明示された時刻を参照時として連用修飾節の形で課題に組み入れることである。特殊条件は、二つ考えられる。一つは、「ばかり」節が連体修飾節の場合に必要とされる。課題の構文は「ばかり」節と同じ構文環境をとるということである。もう一つは、例文に先行文脈がある場合、その先行文脈を連用修飾節として課題に組み込むということである。